

大会名 第13回日本認知症ケア学会大会
会期 2012年5月19日(土)～20日(日)
場所 アクトシティ浜松
演題 TUGを用いた注意機能のスクリーニングの検討
～付加課題を与えた測定との比較～
発表者 岸本 芳 (医療法人聖志会 渡辺病院)
得能 幹生 (独立行政法人 市立堺病院)

【目的】

先行研究において、注意機能低下が認められた高齢者で Four Square Step Test (FSST) を失敗する者でも Timed Up & Go Test (以下 TUG) では失敗が少ないことを経験し、TUG に必要な注意機能の要素は比較的容易であることが推察された。そこで TUG にさらに課題を付加して実施、比較することで、注意機能のスクリーニングとしての有用性を検討した。

【方法】

デイケア利用中の認知機能低下が疑われた高齢者男女 34 名 (平均 79.3 歳) を対象に、注意機能評価として Trail Making Test - A (以下 TMT - A) を実施し、過去の文献を参考に、結果が 78 秒以下の群 (以下 A 群) と 78 秒以上の群 (以下 B 群) に分類した。各群で TUG と付加課題 TUG を実施し、付加課題による TUG 時間の変化を変化率で求め、各群間で比較し、Mann-Whitney の U 検定を行った。今回の付加課題は、水を入れたコップを手に持ってこぼさないようにすることとした。

【倫理的配慮】

本研究に関して病院管理者の承諾、対象者の同意を得た後、当院の倫理委員会の承認を得た。

【結果】

付加課題による変化率は A 群では $115.2 \pm 12.8\%$ 、B 群では $114.6 \pm 12.9\%$ と両群とも時間の延長が見られた。また、2 群間の変化率の比較では有意差は認められなかった。

【考察】

B 群では、2 つの課題を同時に行うことで、注意の分散が上手く出来ずに TUG 時間が A 群よりも延長されると考えていたが、群間の変化率に有意差は認められなかった。これは、B 群の中に付加課題に対して注意を払わずに行い、課題なしとほぼ同じ測定結果になった者が多数見られたことが要因と考えられる。今後、注意機能低下がより結果に現れやすい課題を検討していきたい。